

『源氏物語』夕顔巻冒頭について —頭中将誤認説の可能性—

富永 直美

I はじめに

『源氏物語』は約一千年前に紫式部によって書かれたとされる物語であり、その主題は主人公光源氏の栄華・衰退・子孫の行く末、と大きく三部構成で捉えられている。今回取り上げる夕顔巻はその第一部において若い源氏の恋の一つが描かれる巻であり、そのヒロインが「夕顔」と呼ばれる女である。

夕顔巻冒頭は、源氏が五条の乳母の家を訪れた際、牛車のまま門が開くのを待つ間に、その隣家に咲く白い花(=夕顔の花)に興味を持つことから始まる。お供の隨身にその花を手折りに行かせると、少女が現れて、隣家の女からの白い扇を渡されるが、その扇には、次のような歌が書かれていた。

心あてに それかとぞ見る 白露の 光そへたる
夕顔の花

この歌により隣家の女は後に「夕顔」と呼称されるようになり、かつ巻の名の由来ともなった。なお、本発表では隣家の女を以後「夕顔」で統一する。

さて、この冒頭における女から歌を贈るという行為とその歌の内容については、古来より様々な解釈の分かれるところであるが、本発表はその一説である頭中将誤認説について考察するものである。

II 夕顔巻冒頭の問題のありか

これまで、夕顔から源氏に贈った「心あてに」の歌は、夕顔が見も知らぬ源氏のことを一目見ただけで当世有名な源氏であるとわかり、源氏と推し当てた歌であると解釈されてきた。注釈書でも、

当て推量ながら、源氏の君かと存じます。白露の光にひとしお美しい夕顔の花、光り輝く夕方のお顔は。(※1)

と訳されており、「心あてにそれかとぞ見る」の「それ」が源氏を指し、また「夕顔の花」に「夕方の顔」をかけて、夕顔が源氏の正体を言い当てたとしている。これは、海外で広く読まれている Seidensticker の訳においても同様で、

I think I need not ask whose face it is,
So bright, this evening face, in the shining
dew. (※2)

と訳されている。

しかし、夕顔は物語の中で「もの怖ぢをわりなくしたまひし御心」「世の人に似ずものづつみをしたまひて」(※3)と、怖がりで控え目な性格であると語られているため、夕顔の性格と、女から積極的に歌を読みかけるといふ行動との間に矛盾が生じる。この時代、初対面の際に女から先に男へ歌を詠みかけるといふことは珍しいことで、『源氏物語』の中でわずかにある例でも、どれも色めいた人物によってなされている。夕顔の歌をもらった源氏の感想にも、「「したり顔にももの馴れて言へるかなと、めざましかるべき際にやあらん」とあり、「得意顔に馴れ馴れしく」、「興ざめのする」ようなものであった。

そこで、この性格と行動との矛盾を解くために古注より様々な論じられてきているのであるが、その中に、夕顔が元の夫である頭中将と源氏を誤認したのではないかとする説—頭中将誤認説—がある。(※4)

夕顔巻末や夕顔巻以前の帚木巻で、夕顔は、元は頭中将の妻の一人であったが、他の妻より嫌がらせを受けて自ら身を隠していたことが語られている。したがって、夕顔は冒頭場面で源氏の牛車を見て、夫が自分を探しにきたと勘違いしたと考えることができるのである。

III 頭中将誤認説の根拠

夕顔が冒頭場面において頭中将ではないかと誤認・期待したと考えられる根拠に、以下の本文がある。

人にいみじく隠れ忍ぶる気色になむ見えはべるを、つれづれなるままに、南の半蔭ある長屋に渡り来つつ、車の音すれば、若き者どものものぞきなどすべかめるに、この主とおぼしきも這ひわたる時はべべかめる。容貌なむ、ほのかなれど、いとらうたげにはべる。一日、前駆追ひて渡る車のはべりしをのぞきて、童べの急ぎて、『右近の君こそ、まづ物見たまへ。中将殿こそこれより渡りたまひぬれ』と言へば、またよろしき大人出で来て、『あなかま』と手かくものから、『いかでさは知るぞ。いで見む』とて這ひわたる、打橋だつものを道にてなむ通ひはべる、急ぎ来るものは、衣の裾を物にひきかけて、よろぼひ倒れて橋よりも落ちぬべければ、『いで、この葛城の神こそ、さがしうしおきたれ』とむつかりて、物のぞきの心もさめぬめりき。『君は御直衣姿にて、御隨身どももありし。なにがし、くれがし』と数へしは、頭中将の隨身、その小舎人童をなんしるしに言ひはべりし

これは惟光による夕顔の家の偵察報告であるが、下線部にあるように、夕顔は普段から通りの車に注意していること、そして頭中将の一行に多大な関心を寄せていることが読み取れる。さらに、夕顔は頭中将のお供の隨身や小舎人童まで識別していることがわかる。

これらを踏まえれば、夕顔は元の夫である頭中将によって探し出されることを期待して常々通りを観察していると考えられ、冒頭場面において車中の人物を頭中将と誤認して歌を詠みかけたと捉えることも可能である。すると、夕顔が内気な性格であるにも関わらず、積極的に歌を詠みかけたという矛盾が解決されるのである。

IV 冒頭歌の解釈

では、冒頭場面で夕顔は車の主を頭中将と誤認したのではないかと仮定すると、これまでのように冒頭歌が源氏と言い当てているという解釈は否定されなければならない。果たして冒頭歌は源氏と言い当てているのか、ここでは考察したい。

1) 歌の構造

「心あてに」の歌が源氏と言い当てているとするのは、歌の中の「それ」という言葉によると言われ、また「夕顔」が「夕方の顔」と掛けられて、源氏の横顔を指すと言われてきた。

しかし近年、冒頭歌は、『古今和歌集』の凡河内躬恒の歌の構造と世界の両方に倣い、人を言い当てたものではないとする新解釈が提示されている。(※5)

心あてに をらばやをらむ はつしもの
 おきまどはせる 白菊の花
 (『古今和歌集』277 番歌 凡河内躬恒)
 心あてに それかとぞ見る 白露の
 光そへたる 夕顔の花
 (夕顔巻の冒頭歌)

躬恒の歌で、花の周りの土に降りた一面が真っ白になるほどの初霜が、同じ白色の白菊の花を見定め難くしていることが詠まれているように、夕顔巻の冒頭歌も、白い露の光があたり一面を白く輝かせて、同じ白色のために見定め難くなっている夕顔の花のことが詠まれている。このことから、この2つの歌は、「心あてに～する」という言葉の構造だけでなく、白い同色のものによって惑わされる中で対象の花を詠む、という世界も共通しているのである。

このような同色の中で二つのものが紛らわされて見定め難くなる様子を詠むことは、平安時代やそれ以降の歌に多く見ることができ、月光と白梅、白雪と白菊などの組み合わせを詠む例もある。

したがって、夕顔巻の冒頭歌は、そのような見定め難い状況の中で咲いている夕顔の花を「それか」と推測したものであり、第三者である相手の正体を言い当てるような歌ではないのである。

2) 「光」という語

歌にある「白露の光」という語によっても、相手が源氏だと主張する説がある。「光」が「源氏の超越的美質を表現するための特定語である」(※6)として、「源氏を暗示する表現」であるという。しかし、これは実際に『源氏物語』にある「光」の語の用例を検討することによって否定できる。用例を見れば、「光」は必ずしも源氏特有の語ではないことがわかる。『源氏物語』作中に「光」のある歌は9首あり、夕顔巻を除くと7首あることになるが、そのうち「光」で源氏を暗示しているものは1例に過ぎない。他の例は、どれも源氏ではなく帝を暗示するのに使われている。また、『源氏物語』本文における「光」の用例全95例を見ても、源氏以外の登場人物にも広く使われていることがわかり、例えば、相手の身分を問わず来訪した客人を讃えるものとして、「山里の光」(手習巻)「立ち寄せたまふ光」(橋姫巻)という表現などもある。

以上より、冒頭歌は源氏を言い当てた歌であると断言できず、夕顔が車の主を頭中将と誤認して歌を贈ったと捉えることも可能であると言える。

V 隨身識別問題の矛盾

ここまで、頭中将誤認説が可能性としてありうることを述べてきた。しかし、この説は現在まだ通説にかわるものとはなっていない。その理由は、次の問題が指摘されているためと考えられる。それは、IIIで引用したように、夕顔が頭中将一行の隨身などを識別できていることを考えれば、冒頭場面で源氏の隨身を見て、それが頭中将の隨身ではないとわかるはずである、という指摘である。しかし、この問題は当時の隨身の実態によって、解決することができる。

隨身とは、勅宣により貴人の身辺警護をする者であり、『北山抄』(※7)や『弘安礼節』(※8)によると、大将には8人、中将に4人、少将に2人が近衛府より給され、身分に応じて人数が定められていたことがわかる。故に、夕顔巻において源氏と頭中将は共に中将であるので、各々4人の隨身が仕えていたことになる。

頭中将が夕顔のもとに通っていた際に規定の隨身を全て引き連れていたならば、夕顔は頭中将の隨身を認識しており、冒頭の源氏の隨身を見て、頭中将一行と間違えることはなかったかもしれない。しかし、頭中将が夕顔の元へ通い始めた頃、頭中将はまだ少将であった。すると、上記に従えば隨身の数は2人であり、後に4人に増えた頭中将の隨身全員を夕顔側が把握していたとは考え難い。

また、中将に昇進後もまだ夫婦関係にあったと想定しても、やはり夕顔が頭中将の隨身を完全に認識していたとは明言できない。それは、隨身は常に規定の人数全てを伴うものとは限らないからである。

『源氏物語』や同時代の物語の例をみると、隨身

の人数が身分に応じて定められていても、引き連れる数は時と場合によって調整されていたことがわかる。『源氏物語』若紫巻には、源氏が紫の上を連れ出す折に、

その前に、しばし人にも口かためて、渡してむ、
と思して「暁、かしこにもせむ。車の装束さ
ながら、隨身一人二人仰せおきたれ」とのたま
ふ。

とある。この時源氏は中将であり、本来隨身は4人のはずのため、人数を少なくしていることがわかる。また『栄華物語』巻十三にも露頭の際に隨身を選別している例があり、隨身の人数は時と場合に応じて臨機応変に調整されていたことが確認できるのである。

以上により、これまで頭中将誤認説が否定される根拠となっていた隨身問題も、解明の余地があることが言える。

VI まとめ

これまで、そして今なお、夕顔巻冒頭は夕顔が車の人物を源氏であると予測して歌を詠みかけたとする解釈が主流であると言える。しかし、歌の構造的解釈と「光」という語の検証によって、冒頭歌は源氏と言いつつ当てたものとは断言できず、冒頭において夕顔が車の主を源氏と予測できていたとは限らないことがわかった。

さらに、夕顔が頭中将一行に過度の関心を示していたことから、夕顔が元の夫である頭中将が自分を探しに来たのではないかと期待して誤認したとする説について、最大の問題点であった隨身識別問題にも解明の余地があることを論証した。

夕顔の性格と行動との矛盾を解くために、中には夕顔が実はパトロンを探そうとしていたと憶測する説などもあるが、そのような説は本文の叙述からあまりにかけ離れていると思われる。冒頭場面は、夕顔が元の夫である頭中将と誤認したと考えた方が、夕顔の性格や物語前後の叙述から考えても自然であるということを主張して、本発表のまとめとしたい。

注

1. 『新潮日本古典集成』(1976年)より。
2. サイデンステッカーは玉上琢哉『源氏物語評釈』を参照したと語っている(『世界文学としての源氏物語【サイデ

ンステッカー氏に訊く】』伊井春樹編/笠間書院/2005年)。サイデンステッカーが『The Tale of Genji』(1978年)の脚注で evening face を「Lagenaria siceraria, a kind of gourd」と記していることから、これは氏の造語と考えられる。また、掛詞として捉えているとも考えられる。なお、シフェールの訳は、言葉どおりの情景を表しており、そこに心情的解釈は施されていない。

Ai-je deviné car j'ai cru la reconnaître
sous la blanche rosée qui en avivait l'éclat
fleur de la belle-du-soir

3. 夕顔の死後、右近によって語られる言。
4. 頭中将誤認説は、古くは1598年完成の古注釈『岷江入楚』や南北朝期成立の梗概書『源氏小鏡』にも見られるが、近年盛んに論争されるに至ったのは、1971年の黒須重彦氏の論(「白き扇のいたうこがしたる」(『平安文学研究』1971年6月)。ほか、『夕顔という女』(笠間書院/1975年)、『班婕妤と夕顔』(『文学』1982年2月)、『源氏物語私論』(笠間書院/1990年)、『源氏物語の実相—漢文学の内化—』(笠間書院/1996年))に端を発する。氏は、隨身問題には言及していないが、頭中将誤認説の根拠としては、扇の色や香といった歌をめぐる描写にまで広く着目している。夕顔が差し出した扇が白かったということは、漢の班婕妤の故事を踏まえ、秋になると棄てられる扇に男性の愛情の薄れゆく様を詠んだものとして、夕顔がその心情を頭中将に示唆するものという。また、扇にある常用の香については、元の夫の頭中将には瞬時にわかるはずの特徴であるとして、故意になされたものとする。
5. 清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』(和泉書院/1997年)、『光源氏と夕顔—身分違いの恋—』(新典社/2008年)。清水氏の解釈は、近時の注釈書『源氏物語の鑑賞と基礎知識 ⑧夕顔』(至文堂/2000年)でも取り入れられている。なお、拙稿においてもこれらの和歌については補足を試みているので、参照頂ければ幸甚である(松下直美「源氏物語 夕顔巻の贈答について—「心あてにそれかとぞ見る」新見—」(『国文』2000年7月))。
6. 武原弘「「夕顔」巻の文章表現—「心あてに…」の歌の解釈をめぐる—」(『日本文学研究』梅光女学院大学/1992年11月)。
7. 『北山抄』藤原公任著。
8. 『弘安礼節』1285年成立。

なお、本文中の引用は、『源氏物語』は新編日本古典文学全集により、『源氏物語』以外の和歌及び歌番号は新編国歌大観によった。

また、引用文における傍線は全て発表者による。